

780 中央大学記念日講演（三上參治・変災に際して江戸時代の人）

〔『法学新報』第33卷11（383）号 大正12年12月10日〕

文苑

○変災に際して江戸時代の人

文学博士 三上參治

今日はモウ大分お話が多かつたやうですから私の話はこの頃  
の予算問題の如く繰延べになるのが適当ぢやなかつたかと思ふ  
のですが、しかしまだ多少明るいやうですから、時間が許す限  
り少しくお話をしたいと思ふのです。

私は斯ういふ事を今度の震災について感したので、それは  
今度最も地震の害が激しく、従つて火災に罹つたところを見ます  
と、それは江戸時代の初めの人々が度々洪水の害に罹つて泣言  
をいつた部分と大抵一致して居るといふことですそれはどうい  
ふ事であるかといふと江戸時代の初めの人々がどうも毎度洪水が  
あつて困るといふ泣言をいつたものですから或老人が答へた言  
葉の趣旨は、それは当然のことではないか……その頃本所、深  
川はまだ江戸の中ではありません、下総の国です、そこで下町  
の方であります、下谷浅草京橋神田など、日本橋もその中の  
一部分であります、今日海に近いところではその頃はまだ浪打  
ち際でありました、その下町といふものは多くの部分は沮渚の

地で不忍の池、千束の池、姫ヶ池の三大池を中心としてをりま  
す、されば大雨が降ると上から流れて来る水の為めに、下町で  
は小高いところを除いては広い沼になつてしまふといふ有様で  
す、ところが段々江戸の人間が増加するに従つて、さういふ水  
の掃け場をば考へずに、氣儘勝手に家を立て、行くが故に大雨  
が降れば洪水で困ることゝなる、これは当然の事であり、川  
上で樹木の濫伐といふことも洪水の原因となるのであります  
が、大なる原因は泰平が続くに從ひ水に対する十分な設備をせ  
ずにずん／＼家を建てたのにある、されば毎度洪水に罹るのは  
当然であります。

今度の地震を見てもやはりさういふ感があります、番町あた  
りの高台に火事があつたのはまづ特種の事として、今度地震の  
害が烈しく従つて焼失したる大部分はその昔、洪水の害を訴へ  
た地方である、昔本所深川はまだ江戸でなかつた、その故だん  
／＼と開けて沢山の人が住むやうになつた、其れでも今から百  
二十年程以前に、寛政年間に深川の洲崎神社境内と栄久町とに  
白川楽翁が石碑を建て、何人にも氣のつくやうにこれより南  
の方は今度海嘯の為に家も流れ人も死んだ故に向後人間は棲ん  
ではならぬといふ意味の事を刻んである、今度の地震にその一  
は転覆したそうですが、一は現に建つて居るとの事です、かゝ  
る警告の碑のあるをも顧みずに人間共がその地方に住んで海嘯  
が多いとか、危ないとか泣言をいつて居るのは分らない、地図  
で見るとあれから此方に養魚地がある、養魚地には好いでせう  
魚は人間ではないからですな、また其からこちらに遊郭地があ

ります、是も多少疑ひのある人間共ですから或は住んでも宜し  
からう、何れは人を溺らせるから、水には縁があります、洪水  
のことを詳細にお話をして居りますと、余り時間を取りますか  
ら、これ以上は省くことにいたします。

さて段々と今度の震災火災について、昔のことを聯想いたし  
ますには、誰でも地震では安政、火事では明暦、斯ういふもの  
であります、新聞やまた人の口の端には一六六六年の倫敦の火  
災の如きも大分出て来ます、何て倫敦の大火よりも尚九年か十  
年廻りての明暦の大火事と比較することは寧ろ少ない、兎角西  
洋の例が多く引用せられるやうです、私はこゝで明暦の火災と  
今度の震災とを比較して、之に就いての所感を述べ諸君の御賛  
成を得たいのです、けれども時間の關係で途中で打切りとしな  
ければならぬかも知れませんが、西洋暦でいへば一六五七年であ  
りますが明暦三年の火事といふものはその時の江戸の殆ど全体  
を火にしてみました、八分通り焼けたと書いた本もあります  
が、記録によつて調べますともう少し広いやうです、一は本郷  
丸山の本妙寺、一は小石川の伝通院附近、また一は麴町七丁目  
から出火して、この三箇所が火災の大きな源であります、正月  
の十八日は朝から、烈風が砂塵を捲き上げる、人々それが為に  
眼を遮られるといふ非常な風であつた、その十八日及び翌十九  
日の両日に右の三箇所から出た火が五丁及び十町と隔つたところ  
に飛火して、しかも風位転換、同時にあちらこちらから燃え  
出し焼き尽して、浅草麴町芝などの町端れが少し残つたといふ  
のであります、その当時の統計を書いたものは種々あります

が、焼けたのが町数にして八百町、里数に積つて二十二里二十八町橋で焼け残つたのは僅かに一石橋と浅草橋の二つだけ、死人の数は一口に十万人といつて居りますが、大体それに近いだらうと思ふ、といふのは方々に殍れて居つた人間をば集めて、その当時の非人頭である、車善七に処分させて、それを今の両国の国技館があるところ、当時でいへば下総の牛島の地に穴を掘つて埋めさせた、その時、彼等の仲間であつたのが、始めに六万三千四百三十余人を埋めた、ところがその後芝浦であるとか、房総の海岸とかに漂着したもの又はお濠の泥の中に埋つて居つたとかいふものを合せて四千六百五十四人を埋められた、合せて六万八千数十人となります、それに大名旗本即ち武家の屋敷で死んだ人は此外でありましようから全体にすれば随分多い、今度の震災の死人よりも数が多いと思ふ、今日の東京市は尢大なるものでありまして、その人間は二百万を超て居る、明歴の昔も江戸は盛んでありました、人口の精密なる調査は分りませんが、私の考へでは百二十万位であつたらうと思ふ今日よりは少い、然るにその中で死者は今日よりも多いのでありますから、その被害の割合は今日より遙に多いことが想像される、即ち東京は地震ばかりでなく、火事でも大きな損害を受ける、されば若しその頃先刻の三浦教授の御話のやうに火災保険といふものがありましたならば、震災による火災は保険の責任に任せずといふと同じく風災に因る火災も責任無しといふやうな妙なことが起るかも知らない、其からこの時に右の牛島の穴の上に回向院といふものが建てられた、一時は諸宗山回向院

と概括した名前になつたこともあるそうです、今度の本所の被服廠跡で多く死んだといふやうに明歴には浅草橋の外で、多数の死人が出来ました、種々当時の人の書いたものを見ますと、京橋辺、江戸橋辺の屍骸の累々たる有様といふものは今日の新聞に見るところによく似寄つたものです、加之今一つ大きな気の毒なことといふは十八、十九の両日烈風で焼きまくられて焼野原……バラツクもまだ出来やしない、そこへ三日目の二十日には大雪でした、それが為に凍え死んだ者が少なからぬのであります。

又十八、十九両日はまるで食物がありません、三日目から粥の炊出しを行つた、幕府では之れを始めとして多く機敏な処置をしたものです、例の智慧伊豆といはれた松平伊豆守信綱をはじめ多くの賢相が幕府に立つて居りました時代ですからなかなか処置がよろしい、さて炊出しをやりましたが、粥を受ける器がない、茶碗といふものがない、粥を貰ひに行く者は何を持つて行くか焼瓦の破片、鮑貝、赤貝の殻、そんな類のものを持つて行つた、まことに何もかも焼け尽された有様は、今回でもさうであります、実に悲惨です、江戸城本丸も焼けてしまつたから……西丸は残りましたが……將軍自身も僅かに小さい夜着を着て吹上の庭に避難をされたといふことであります、馳て諸大名諸旗本が將軍の御機嫌を伺ふことになつたのですが、袴のない者が多い、是に於て裁付姿カイツツギで、將軍家に謁見をした、尾洲家、紀洲家といふやうな身分の殿様でも革羽織を着て、裁付姿で登城した、丁度今回宮内省で臨時に衣服の制限を寛大にせ

られたといふ特例が出来たのと同じ次第であります、大名の夫人方でも野原に定紋を打つた幕を張つて、その中に避難をして居つた、上野の花見などに幕を張つて居るのは見事ですけれども焼野に幕を張つて、その中に起臥するといふのは気の毒なといふ外はありますまい、斯ういふやうに明暦の昔と今回と惨害の有様は相似て居ることを並べ立てれば際限はありませんが、それもこれで総て打切ります。

斯かる大きな出来事でありますから、人々はこれが為に大きなシヨツクを受けたことはいふに及ばぬ疾風迅雷の時はず変ずといふ諺がありますが、かゝる大震災のシヨツクを受けた人々は感じの上に、又、思想の上に変化を受けるのは当然な話であります、されば今回の災害についても或は物質上から、欧羅巴の文明、特に建築などがまだ十分に日本の土地に消化し適応して居ないことにかかる試練を受けたのであるといふ批評をする人もあり、或は精神的方面から世の中が一般に不真面目に、軽佻浮薄に驕奢淫靡になつて居つたから斯かる天罰を受けた人事と天事とは別の事であるが、ここに反省して国民の立て直しをやらなければならぬといふ批評もある、私もその一人であります、さて明暦の昔の人が自分の蕃地に手紙を出したものが今にどうかすると残存して居り、また当時の人の感じを書いた随筆その他記録類も存在してをりますが、これらを見ますと、如何にも今日の人の所感と符節を合せたやうなこともあります、また時代が變つて居りますから、彼此頗る似て居ない方面のこともある、その中の著るしい二三の例を申して見やうと

思ふのであります。

旗本の一人で頗る地位のあつた人でありましたが、兼松又四郎といふ人があります此人が熊本の細川家の四人の家老に送つた手紙があるそれは当時の人の精神的方面の感じを現はした代表的の手紙であると思ふ、彼此長いものでありますが、大要は、江戸城が焼けて累代の各器宝物なども残らず焼けてしまつた、併ながら是等のものは無くても苦しからざるものである近年大身小身のもの私式のもの又は下にまでも驕りに長じ人々目を驚かし、榮耀<sup>マツ</sup>榮華を尽して居るされば生活の費用の多いが為に、上の者は民百姓に向つて請求を事とするかく人々の心掛けが悪いが為に天罰を下されたのである、これは私兼松又四郎ばかりではない皆の人がさう悟つたと申して居る、まことに左様であらうと私も存じます、天道から好き意見を受けたのであるから人々は積年の非を改め、驕りを止め古の真の武士の方式に立帰りたいと存ずる、拙者なども唯今までのことを顧るといふと、如何にも小娘が難遊びをして居つたやうな具合に感ずる、まことに耻かしいのである、兎角世間の驕り止まざるところに自然と斯様な変災が起るのである、上下の驕りが是にて止むならば変災も却つて御代長久の基と相成るであらう、人の一代には何れ火事にも逢ふものであらうが、逆も火事に逢ふものならば今度の火事に逢ふたのは仕合である云々、かゝる感じよりか、決心が出来たから面白いので即ち焼太りにもなり得るのである、それから、お家（即ち細川家）も江戸の初めに建てられてから五十幾年かにもなつて居り改築の時期にも達して居るので

焼けたから却つて破却する手間暇もいらず、お目出たい云々と  
いつてをりますこれは昔柳宗元は人の出火を賀する文といふも  
のを書いて居りますが蓋しそれと同じ意味のもので、ありま  
す、それがまた兼松ひとりの感想なるのみならず、紀州家の御  
先祖も尾張の殿様と相並んで登城された時にこの天守も御建築  
後最早年久しくなつて居るから、お建直しなさるべき時節が来  
て居つたのである、さればこの度の延焼も苦しからざる事であ  
るといはれた万事斯ふいふ調子で諦めて樂觀をして居りますれ  
ば、いつまでも沈んで居るのでなくして所謂復興気分が豊かで  
あつたであらうと想像されるのであります。また大久保玄蕃頭  
忠成といふ小田原の大久保の分家の人、これが諸大名も登城を  
し老中などの列席して居るところで、自分の所感を述べたこと  
が或る書物に載つて居る、それは面白い観察をして居るのであ  
ります、即ち御老中達に向つて玄蕃頭は、この度の大変は將軍  
家の御為にまことに御代長久の瑞祥でお目出度いことである、  
何故であるかといへば、今日の江戸の泰平といふものは東照公  
が久しい間攻城野戦千辛万苦をせられ次で二代目秀忠公も苦心  
をせられた賜ものであるところが三代目及び四代目の当將軍は生  
れながら將軍となられたのであるから世の中のこととは御存知が  
ない、然るにこの度の大火災によつて將軍家御自身の御衣服も  
無くなり召上るものも御不自由のこととなつたのみならず、多  
くの家来共の立働いたさまを御覧になつて多くの人物も御分り  
になつたらうから、それがこの後の政治のお助けになることは  
確かである、……將軍家綱は此時十七歳でありますから、斯う

いったのです……加之天道は盈満を戒める、余り満足をせらる  
ればまた欠けて来るそこに今度の火災といふものがあつたので  
す、已に満月が欠けたからこれからまた段々と丸くなつて行  
く、故に庶民の家屋も一兩年を出でずして昔の如くに作られる  
ことでありませう、まことに結構千萬な出来事でありますと述  
べたので、老中共も成るほど、いふた事でありました、之も最  
も代表的に所感を述べたものであります肥後の細川家の主人は  
平素秘蔵したところの鷹だの小鳥だのをかゝるものは今日愛玩  
して居るべきではないといつて、早速放つてしまつたといふ事  
であります、皆がかゝる緊張した、心持になつて居りました、  
かやうな類例を並べて見れば数限りもないことです甚だ畏き話  
であります、今朝拝見しました詔勅の解釈の材料となるべき  
話が甚だ多いのであります、是等古人の話と詔勅とを並べて批  
評することは恐れ多いことではありますが其内容からいつて見ま  
すると彼此符節を合せたところが多いと感ずるところでありま  
す。

然らばこの明暦の火災前の世の中はいかに自墮落になつて居  
つたか、どうして斯んなに江戸中が焼けるやうな天罰を受けな  
ければならなかつたか、その有様如何といふことになつて参り  
ますると、火事の十年、二十年前からの話をしなければなりま  
せぬがそれはなか／＼話が長くなりますまた今度の大震火災が  
若し天罰であると解釈するならば、我々東京の人間はどんなこ  
とをして居つたか、世の中の風潮を見たならば、最も唾棄すべ  
き事も多かつた、紳士の風上には置けないのみならず風下にも

置けないやうな事をした人が或は新聞雑誌などにほめそやされる、恋愛至上主義などを唱へて他人の女房を盗んで之と、心中をして、それが為に或る部分的にといひながらおほめに預るといふやうなことがあつた、斯ういふ類の人が天罰を受けるのはよいが、これが為めに捲き添を蒙る十万近くの人は実にお気の毒な訳であります、そこで歴史上の考証を述べることは暫くお預りとして、こゝに面白い一二のことをいつて見ましよう、面白いといつてそれは或は私だけのことであるかも知れませぬ、昔から童謡といふものはよくその当時世相の反映たるものであります、童謡か識をなすといふことは昔からあります、市井で唄ふものも案外軽忽に出来ないものであります、諸君御記憶であります、先年ストライキ節といふ俗謡が流行しました、そうすると間もなくストライキが流行し出したことがありますこの頃世の中を風靡しておるものに鴨緑江節、などがあります、鴨緑江節といふものはよいものだと思ふ、安来節は左程には思ひませんが、人の話によれば、あれに伴つての踊りは、よほど変なものだとのことですが、ところで明暦時代には火災よりズツト以前から歌舞伎踊といふものが盛んであつて、随つて弊害も多いものですから幕府がこれを圧へた之を圧えたによつて海道節柴垣節などといふものが流行り、別して柴垣節は貴賤上下共に大に之を喜んだ、その踊りに用ひる文句を読んだけれどもなか／＼面白さうに見える、どういふものであるかといふと、いづれ河原者がするといふのですから、浅草辺に出るやうな種類のものでせうが附け鬚をして、衣装は行も丈も短かい着物、併

ながら上には金襴の袖なしの羽織を着その紐は先づ紅の房にしたもので、それに金銀の拵への大小頭には頭巾を冠つて、然うして舞台に出て来る大名などの宴席にも侍べる、三人五人一組になつて一人が音頭を取つて唄ふ、他のものはそれに連れて、手をまげ足をあげて種々な顔つきをしながら、肩を打つたり、胸を叩いたり、傍から見ると、いかにも癩痢病やみが氣狂ひになつたやうな様子であると……面白い事書き方がしてあります、踊る当人も面白さうにやるし、見て居る者は無論面白さうである、鼓、大鼓、三味線、胡弓などで囃したてるその歌はどういふのかといふと、始めのところは田舎の盆踊りでもやるやうに目出た／＼の若松さまよ、枝も栄へりや葉も繁るといふのでさうして次に、柴垣ゆひ立てこんで最早この町には生まれ申すまい、といふのが半分です上下貴賤皆面白くこの歌を聞き踊を見て居つたがそれが識をなして大火事と為り人々この町には生まれないうやうになつてしまつたといふのです、それが即ち所謂童謡識をなしたといふものであります、泰平無事人々皆遊戯に耽り、不真面目になつたから斯ういふ歌が出来かゝる踊が出来て、その結果が現はれたのだといふのです、但し歌の前半が目出た／＼の若松様云々だから確に早く復興するといふやうな批評なども出て居ましたこれと今の安来節に伴ふ踊その話を聞けば大にしばがき節に似通つたやうな感じがするのです。

そこでその火事に十万人が死んだのですがその死んだ人の有様を先刻の兼松の書面に書いて居るのを見れば、いづれも皆財宝を惜み忿心の為めに兎や角として居る中に火が前後左右に廻

つてしまった、或は車長持を多く引出して道路を狭くしてしまつたのでそれがいよ／＼延焼の媒となり、多くの人が焼死んでしまつたとのことです、当時には後の江戸時代の火災に最も有功とせられた穴蔵といふものがまだなかつた、絵にも書いてありますが長持の下部に車のついたやうなものを、車長持といふて多く用ひられたこれは如何にも便利なものでありますが大火の時には偶々これが延焼の媒介をしたのです物慾は古今東西免れないところの人情であつて、決して罵るには当りませんが兎に角物慾の為に生命を失つたものが非常に多かつたのですこれは今日も明暦の時と同じであります、また唯だ明暦の時にあつて、今日にはなかつたところの死方がある、それは何であるかといふに先刻の兼松の手紙にも武家方の多くの屋敷で死んだものは数がよく分らないが中には大名の奥方に附いて居つた侍共が、奥方が死なれたので生きて詮なき事だとして追腹を切る者が多くあるといつて居る、江戸時代の初期には洵死(マユシ)が留められて居りませんでかく、主人が死ねばお取立てになつた者は間々追腹を切るそれは今日は全くないのであります。

そこで今一つ昔と今と類似のことを申し上げますが、今回は例の所謂不逞鮮人の騒ぎ、不良青年の騒ぎ、掠奪、強盗、窃盜の騒ぎであります、これは人心の恟々たる際にはどういふ場合にもあることでありまして、唯だ今日は朝鮮人といふ形になつたのですけれども、明暦の昔には当時の法令類に書いたものは「いたづら者」とあります、即ち浪人、下々のあぶれ者、切取り強盜の者、火付けの者、是等が最も著しいいたづら者であ

る、そこで兼松の手紙にしましても、又その外当時の人の書き留めて置いたものを見ましても、如何にも今度の火事と同じやうに大元は三箇所でありませけれども非常な烈風で二日の間に江戸中の八分以上を焼いてしまつた、五丁十丁飛火をして、同時に火が起る、人々それを見てこれは只事ではないと思つた、只事でないといふ説明をどこから求めるかといふと、丁度これから五年以前に由井正雪、丸橋忠彌等一味のものの陰謀があつた、そこで由井、丸橋等の残党が諸所に放火したものと思はれた。全く今度の人心恟々たりし有様と同じでありました、それでこの心配は単に下様ばかりではない、今度も警視庁の連中も流言蜚語に加はつたとやら加はらぬとやらいふのですがこの時は幕府の内閣も驚いた、將軍を何処へお逃がししようか、上野へか、牛込の矢来の酒井家の屋敷へ移らるるか、曰く何曰く何と話は出ましたが、結局西丸の吹上に居らるゝのが一番安全だといふのでそう極りましたその時の評議の有様を見ると、大老酒井讃岐守忠勝は、火災とは申しながら不審なきにあらず、この災禍に乗じて悪党の志すこともあらうといつて居る、さうすると井伊掃部頭直孝が、御一同の御意見の如く尋常の火災とは思へないといつた、大老、老中もかくの如く所謂人心恟々であつたから、下々の者共も同じ心持である、是れに於て今日では例の自警団といふものがあり、政府でも戒嚴令を布かれましたが幕府では旗本達に命じて江戸を巡察せしめる、町々にも従来辻番といふものがありますが、その数を増加せしめる、而して火を放けるもの、掠奪するもの、その外人を傷けたものなど

に気をつけて、一般の者がそれを知つて訴へて出ると、金二十枚を下さる、それで新聞はありませんから、諸所に高札を出して、この近所では、万世橋の附近に高札が立てられました、而して当時の自警団の有様は町々の境界に竹矢来を拵へ、その竹矢来には門が出来其脇には潜り門が出来て居る、夜番をする、通行する者があれば、どちらへ入らつしやると聞いた、町送りにして送つてやる、夜の八時になれば門はピッタリと締めて、唯だくゞり門だけにして、迂散臭いと思ふと……それを斬つても宜しとは云はぬ……調べて見るのです、そこで例の名高い話があるのですが、かゝる時ですから松平伊豆守信綱は煙草を喫つてはならぬと令した、ところが伊豆守の家来で密かに喫つて、畳に焼焦げを拵つたものがあるこれは大に怪しからぬ、打首にしようといふ事になつたのですが、流石に知恵伊豆だから打首にしたところで多くのもの、懲らしめにならぬといふので、煙草のぬすみ喫ひをやつて、その吹殻で畳に焼焦げを拵つて刑に行はれるところの状を例の山田右衛門作といふ島原浪人に油絵に描かせて多くの人の見るところに立てさせたといふ、所謂今のポスターでしょう今は煙草の禁令はないが、バラツクの有様などを見ると、どうも煙草はおやめになる方が好いと思ふ、バラツク立の時には日々火事があるといふことは間々承るので明暦の昔もさうであつたのであります、そして余り火事が多いとなると、人々火を防がうとはしないで、たゞ荷物を纏めて逃げようとする心理状態になるのであります。

段々と時間が迫つて参りまして、お聴きになる方も御都合が

悪いと思ひますが尚一つ申し上げたいことがあります、それは物価調節のことであります、明暦にも一日二日は物価が高かつたが、三四日後にはそれが定まつて来て、調節される、そうして江戸の人口を減らす、今日では汽車の屋根にまでも人を乗せて地方へ送るのでありますが、昔は参観交代の制度は幕府の大なき憲法(マコ)でありましたが、その制度をも臨時に変更して、地方にある大名は参観交代に出府するな、江戸で焼けたものは臨時に国に帰れといふのです、大名一人が帰りますと、それに従つて居る家来が、数百人、或は数千人も帰りますから、これなともうまい事をやつたものです、今日の人でもチトかゝる呼吸を参考にせられたら好からうと思ふのであります、それから幕府は大名には何年賦返上といふことにして建築の費用を貸し与へる、旗本の中には割合を定めて金を与へる、町人にも店間口一間について一兩一分余の率即ち今日の金相場とすれば約二十五円位に当たる割合で金を下さつた、其から今日の詔書の中にも仰せられてあります、人々が真面目になつて、儉約を主としなければならぬ、ついでには衣服も質素にせよ、建築でも国持大名たりとも三間より長い梁を用ひてはならないと令し、江戸城は本丸も焼けてしまつたけれども、その建築もこの時勢に鑑みて延期をするから、大名達もそのつもりで居れと令し、道具類も金銀を用ひてはならぬ、梨子、高蒔絵などを拵へてはならない、参観交代の節その他年中の節句の献上物も節約をせよといふ事であります。

斯やうにして時に取つて好いことをしたのであるけれども人



間といふものは何時の代にも、つむじ曲りがあつて、どんな場合にも反対をする者がある、明暦にも今度の火事も根本を詮索して見れば幕府の役人ではないか、政治が悪いから天が怒られるのだ、天が怒られて、火事が起つた、さすれば即ち火つけの源は幕府それ自身ではないかともいふ、炊出しをするのも良いが、それは仁の小なるものであるもつと大なる仁を知れといふ、それから又衣服調度の儉約をするのも好いが、そんな事を嚴重にしては職を失ふものが出来る、職を失へば衣食に窮して盗賊ともなり又火付けともなると非難する何が何やら分らぬこととなる、昔のやうな言論の不自由な時代に於てすら斯ういふ批評をするのですから、今日の世の中に於ては矢釜しくいふのも驚くには当りません、明暦当時の落首で「火は消さで膳（おぼろ）を消しぬる仕置衆（有司）の手を廻はさいで、目をまはすかな」などと洒落て居るものもありました。

最後に一言したいことは明暦の昔上野の丘なる今の西郷の銅像の辺りに林道春先生が住んで居られた、そこへ幕府の助力で銅で包んだ書物庫を建て、珍書を集めて居られた、然るにそれが十九日の火事に焼けてしまつた、その時代の林家の書庫の焼失は今日の帝国大学の図書館の炎上にも当りませう、或は当時  
に於ては今の大学図書館の炎上よりも一段と文教上の大惨害であつたかも知れません、併しながらまた一方にはそれから三ヶ月目に水戸藩では義公が大日本史編輯のために史局を開かれて、学問勅典（くわもんてつてん）の（もと）一源泉となりました、やがて元禄の時代が来て学問はいよ／＼隆盛となりました、政治及び社会の一般の情勢

から観ても上下の人々の努力によつて災後久しからずして寛文の立派なる時代があらはれました、されば今回の大震災もいつまでも悲観してはなりません、努力次第で復興も早く、立派なる時代の出現を待つことが出来ましょう。

今日は之で御免を蒙ります。時間の足らざるが為めに談話を中略したところの多いのを遺憾に思ひます。

（本稿は十一月十一日中央大学記念日の講演の速記を博士に  
より補訂せられたるものなり）